高校生の建築設計創作展

県建築士事務所協会（仲摩和雄会長）は2月25日、県庁舎新館で2018年度第43回県工業高校建築設計卒業創作展入賞作品の表彰式をした。

今年の設計課題は「ふるさと大分が記憶に残る家」。設計条件は、敷地面積・形状は自由、建築面積は300平方㍍未満、構造・階数・材料などは自由。

応募点数は、鶴崎工業10点、大分工業10点、日田林工6点の合わせて26点。入選作品は、最優秀賞1点、優秀賞2点、佳作4点。

入賞者は次の通り。

▽賞＝設計者（高校名）

▽最優秀賞＝岩本龍征（鶴崎工業）

▽優秀賞＝宮崎龍太朗（日田林工）三苫菜月（大分工業）

▽佳作＝岩田美裕（鶴崎工業）薮崎紘己（同）渡辺誠也（同）渡邉風夏（大分工業）。

この大分県工業高校建築設計卒業創作展は、建築に対する夢を創造し作品にすることを目的として昭和51年に創設され、本年度で第43回となるものです。毎年、夏休み前に「設計課題」「応募要項」を発表し、翌年1月下旬に作品を完成させ、各学校の校内審査を経て応募されるものです。

本年度は26点の応募があり、審査委員により審査を行い、最優秀賞（大分県教育委員会教育長賞）1点、優秀賞2点、佳作4点を選出し表彰するものです。私どもは、建築士事務所団体として、良き後継者の育成を図り、調和のある快適な環境の創造をめざし、地域文化の発展に寄与したいと考えております。これから大学や社会へと進まれる皆様には、次代を担う社会人として未来に希望を持ち健康で明るく、何事にも努力していただき立派な社会を作っていただきたいと期待しています。

㈳大分県建築士事務所協会
会長　仲摩 和雄

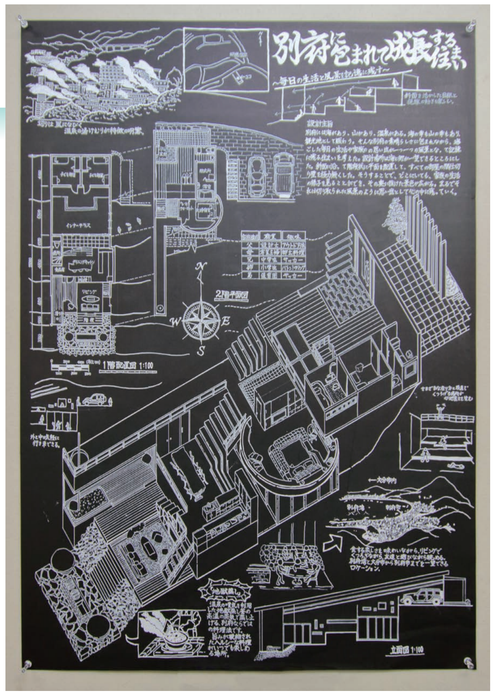
最優秀賞
大分県教育委員会教育長賞

別府に包まれて成長する住まい
～毎日の生活と風景を記憶に残す～

鶴崎工業
岩本　龍征

設計主旨

別府には海があり、山があり、温泉がある。海の幸も山の幸もあり、観光地として賑わう。そんな別府の素晴らしさに包まれながら、過ごした毎日の生活や家族との思い出が一つ一つの風景となって記憶に残る住まいを考えた。設計場所は海と街が一望できるところにした。斜面に沿って、階段状に平面を配置して、すべての部屋の間仕切り壁を極力無くした。そうすることで、どこにいても、家族の生活の様子を見ることができ、その奥に抜けた景色が広がる。まるでそれは切り取られた風景のように思い出として心の中に残っていく。



優秀賞
古後中学校リニューアル

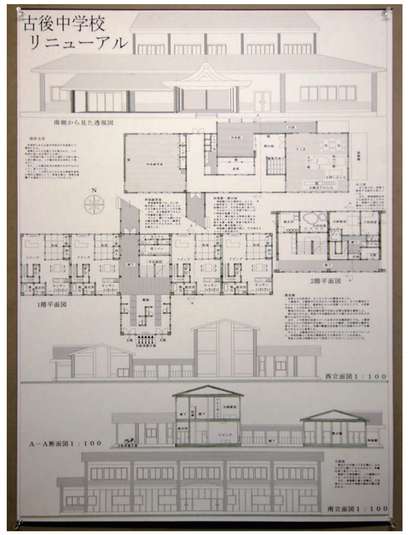
日田林工
宮崎　龍太朗

設計主旨

玖珠町にある古後中学校が今年度限りで廃校になる。地域の人々に必要とされ愛された。この校舎に思い出を残す人も多い。

この校舎で育ってきた人達がこの町に帰ってきた際には、この集合住宅を利用して頂きたい。また、この集合住宅は若者のためのものとして、造っている。

そして、この町に古くからある神楽を後世に残せる場所として、神楽を教え、神楽を披露する場所としてリニューアルした。



優秀賞
記憶に残る石橋の風景
～分寺橋とともに成長する住まい～

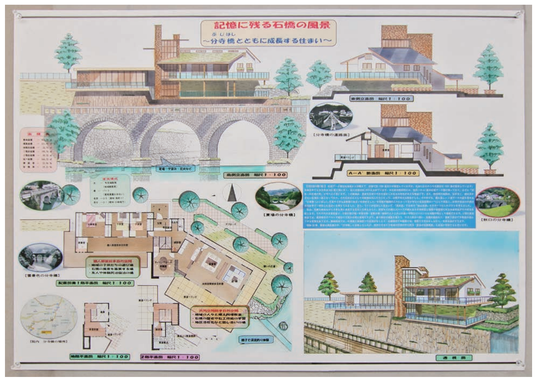
大分工業
三苫　菜月

設計主旨

石橋アーチ橋は北海道から沖縄まで、全国で約1700基ほどが現存していますが、九州にはそのうち大部分の1581基が集中しています。九州の中でも大分県は484基と特に多く、実に全国の約28％を占めています。大分県の院内町には、県内一の61基の石橋アーチ橋が残っており、まさに「日本一の石橋の町」と呼べると思います。この地域は、豊富な石材とそれを活かした石工の存在が大きな理由です。また、院内町の地形は、谷が多く、橋は欠かせない生活の一部となっており、そのため石工としての技術は村人にとって、必要不可欠な技術でした。その中でも、最も美しい3連アーチの姿を見せる「分寺橋」を見下ろせる丘陵地に住まいを設計しました。分寺橋が地域の人々にとって欠かせない生活空間の一つとして存在し、日常の生活の子供の成長の中で一体化した住まいを考えてみました。また、ライトが設計した住まいで、「落水荘」や日本の「旧山邑邸」をモチーフにしたプランを考えました。

私は、石橋を眺めながら子供も共に成長する住まいを考えました。寝室などの個人スペースの前にある多目的室と居間や食堂前にある多目的室がその成長を促します。それぞれの多目的室で、子供が遊び場・学習の場・食事の場・地域の人々とのふれあいの場などいろいろな活動の場として使用できます。2階の展望風呂では、屋根部分やベランダ部分で夕涼みの場として使用できます。地下部分の通路を通じて、テラス部分へ誘い、石橋を眺めたり、屋根下部分で子供達の遊んだりする空間もあります。敷地周辺では、子供達と渓流釣りや水遊びをしたり、石橋周辺での散策では、家族で夕涼みをしながら、日常会話ができます。

昭和20年、戦後の混乱期の中、「分寺橋」が完成しましたが、現代の今まで子供達の記憶の中に残る「豊後の記憶遺産」として永遠に存在すると思います。



佳　作
伝統文化・技術を受け継ぐ
～日本一の棟梁、それが私の夢！太鼓の魅力も伝えたい！～

鶴崎工業
岩田　美裕

設計主旨

私の夢は、一人前の大工に少しでも早くなって、人が喜ぶ住宅をたくさん造ることです。また、将来は、モノづくりを楽しみたい人にＤＩＹ技術を教えたり、趣味で始めた太鼓の演技を楽しむことです。そこで、将来の私の理想の家ということで、設計することにしました。まずは敷地ですが、野津原に今度できた大分川ダム付近としました。親成のある野津原には、小さいころから何回も訪れ、ダムができる前の様子や完成するまでの景色が今でも脳裏に残っています。ダム湖を取り込んだ遠景の望める雄大な景色の敷地に、ダム建設のために沈んだ地域の人々にとっても、心の休まる空間を作りたいと思います。私は、たくさんの人々の喜ぶ顔が見たくて、厳しい大工の道に進む決心をしました。今回、一番最初に考えたのは、太鼓の演技を見せる舞台です。遠くまで見渡せるダム湖を背景に屋外ステージを設けました。景色を眺めたり、人が集まってバーベキューなどもできる、人の集うスペースとして設けました。夏の夜、たいまつの灯りの中で行う太鼓演舞は、最高に盛り上がると思います。住居棟では、屋根の形状を、周辺の山の尾根を意識しながら、うねった形状として、地域のランドマークになるようにと考えました。設計のヒントとしたのは、大分市立美術館の展示棟の屋根でした。そこでは、やさしさと力強さを感じたことを思い出します。また、仕事場（資材置き場兼切込み場）は、成長しながら進化していくようにダイナミックな形状としました。集会などを行える囲炉裏の間（ま）と仕事場の間には、ＤＩＹを教えるスペースとして屋根の架かる屋外空間を設けています。絶景を眺めることができる小さな公園として、各々違う目的で集まった人たちの楽しい交流が生まれることが最高の喜びです。

佳　作
カスタマイズで家を造ろう
～古い住宅地に新しい魅力を取り込む～

鶴崎工業
薮崎　紘己

設計主旨

大分市にある住宅団地は、開発されてから数十年が経過しようとしているものが多く存在します。古い住宅であるからこそ地域住民の高齢化が進むと同時に空き家や貸し家が増加し、地域住民のつながりも希薄なものとなりつつあるのではないでしょうか。そんな団地内の公園では遊ぶ子どもたちの姿もなく、もはや子どもたちが豊かに成長する魅力のある環境ではなくなってしまった気がします。若い人たちにとっても魅力のある団地にしなければ、現在の寂しい状況に改善はなく、地域や地区活動も実施できないような高齢者だけが住む住宅団地となってしまいそうです。

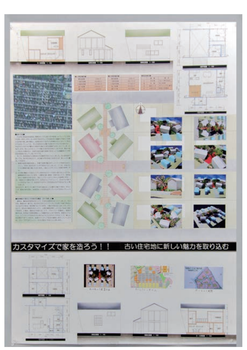
そこで、住宅団地の土地形状の大改革をすることにしました。古い住宅地であっても、地の利があるので、住む魅力が住宅地に生まれれば、若い人々も集まってきます。

①単調な街路計画を改造し、子育て世帯が喜ぶポケットパークを取り込むことにし、安全に遊ばせることができるようにしました。ここは、お母さんたちの情報交換の場にもなります。（例としてボンエルフ明野を参考にする）

②８世帯が集まって住むことで、共有するスペースを広く設けることができ、連帯感を作り出しています。人専用の道（路地）も設けることで、団地全体の一体感も生まれます。（例としてカームタウン木の上を参考にする）

③一軒あたりの敷地が狭いので、住宅はコンパクトにして、自分たちで家づくりをする「ＤＩＹ」で、住宅をカスタマイズする住み方ができるようにと考えました。

自分たちで、家づくりに親子でも取り組めることは最大の魅力であり、そのことが、家族の絆を深め、地域住民との交流も広がっていくのではないでしょうか。



佳　作
来ればわかる自然遺産・内成棚田を守る
～素晴らしい自然が観光の目玉にも　守れ！自然遺産～

鶴崎工業
渡辺　誠也

設計主旨

別府市の内成棚田は、戦国期から江戸期にかけて開かれ、面積は40余ヘクタール、水田1000枚と まさに千枚田。これを60戸で維持しています。日本の水田面積の250万ヘクタールのうち、８％が棚田です。農業従事者の高齢化、後継者不足などの理由で、棚田の放棄率は40％にものぼるようです。そんな棚田は、土地に水を蓄え、「小さな治水ダム」とも言われているように洪水調整機能があります。また、平坦地の水田に比べて昼夜の温度差が大きいためお米がゆっくりと熟成します。さらに、豊かな自然が残っているのでいろいろな生き物が生息しており、棚田の景色が人の心まで癒してくれます。そこで、観光都市別府のもう一つの自然遺産としての棚田を、記憶に残る景色として守るために、ここの建つ住宅の形態を考えることにしました。その設計ポイントは、

①レベル差のある棚田を利用した断面計画とし、建物のヴォリュームを低く抑えることで、風景に溶け込みように考えた。

②緩い勾配の屋根が道路からつながっているので、芝生で緑化した屋根の上は広場となっており、景色を楽しんだり、寝ころがったりと、ポケットパークとして開放している。

③半分が地下に埋まっている断面構成は、省エネルギーとして負荷の少ない住宅である。

④リビング・ダイニングからは、絶景が見渡せるよう大きな開口部を設け、季節　によって薪ストーブや広いウッドデッキに人が集まるようなスペースを設けた。

⑤子育てする若い世代にも魅力ある空間とするため、棚田の中に住んでいることを常に意識できるようにし、四季折々の棚田の風景を楽しみながら「感動」「変化」のある生活をおくることができる。

どこにもない圧倒されるような素晴らしい自然の中で、人と人との絆を深める米づくりを体験した子供たちは、自然遺産を守る後継者の一人として成長していくことでしょう。

佳　作
ふるさとの箱
～ふるさと大分のDNAをうけつぐ横浜の家～

大分工業
渡邉　風夏

設計主旨

私は大分県大分市出身。郊外の自然豊かな土地で育った。自宅の横に川が流れ、ボートにのって遊んだり、よくキャンプにも行った。

小学生の頃からサッカーに熱中しており、高校まで続けた。

５歳の頃からの夢だった消防士になった私は、大分をはなれ、やがて結婚し、２人の子どもに恵まれた。私たち夫婦は、今住む集合住宅からの住み替えを考えた。子どもたちには、自分が小さいころのようにのびのびと育ってほしいという思いがあり、便利の良さより生活の自由を選んだ。

大分から遠くはなれたこの土地でも、あの大分が記憶に残り、そのＤＮＡを子どもたちがうけついでいけるような住宅を設計した。